

# 日本銀行の歴史からみた 中央銀行の役割

上

日本銀行金融研究所企画役 鎮目雅人

二〇〇九年十一月一日(日)、日本銀行本店において、日本銀行の歴史をテーマとした「市民講座」を開催いたしました。本稿ではその講演の概要についてご紹介させていただきます。

日本銀行は、日本でただ一つの中央銀行です。中央銀行の仕事を一〇で言うと、世の中の人々が「おかね」を安心して使えるようにするということです。本日は、日本銀行の歴史を通して中央銀行の役割についてみていきたいと思います。

## 日本銀行が 設立されるまで

日本銀行が設立されたのは一八八二年(明治十五年)です(写真1)。現在の日本銀行は、東京の日本橋本石町にあります。開

業のときは日本橋箱崎町の永代橋の袂たもとにありました(写真2)。開業当時の組織は五局一三課、総人員は五五名でした。

ところで、日本銀行ができる前、例えば江戸時代には、どういうおかねが使われていたのでしょうか。まず現金として使われていたのは、金貨(小判など)、銀貨(丁銀、豆板銀)、銭貨(銅貨など)、そして地方では、多くの藩が藩札という紙幣を発行していました。つまり、さまざまなおかねが流通していました。

小判(金貨)は一枚が一両でした。丁銀(銀貨)は匁もんめという重さの単位で取引されていました。銭貨は一枚が一文もんでした。そして、現代において円とドルの相場が日々変動するのと同じように、日本の国の中で流通している金貨、銀貨、銭貨といったおかねの間の相場は日々変動していました。そのため、自分が持っているおかねと違う種類のおかねを使いたい人は、両替商へ行つてその日の相場で両替をしてもらわなければならなかったのです。

両替商は、現金の両替とともに、商人などからおかねを預かる預金業務も行っていました。現代では民間銀行が行っている仕事を両替

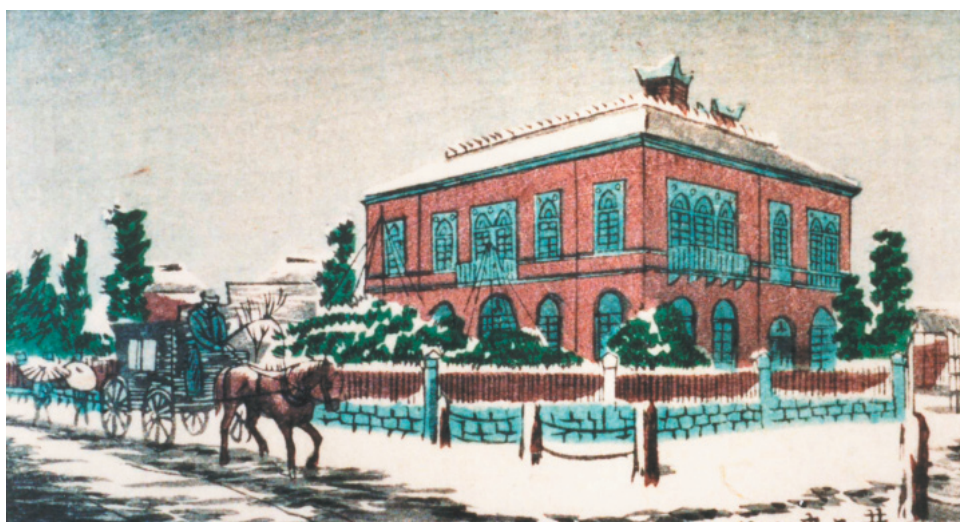


写真2「永代橋際日本銀行の雪」  
(井上安治【画】、日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵)

表1 1881(明治14)年末の貨幣流通量の内訳

合 計	195 百万円
金属貨幣	42 百万円
金貨	14 百万円
銀貨	17 百万円
銅貨	11 百万円
紙幣	153 百万円
政府紙幣	118 百万円
国立銀行紙幣	34 百万円

(注) 四捨五入の関係で合計が合わない箇所がある。  
(出所) 大蔵省編「明治30年幣制改革始末概要」

商が行っていたわけです。もっとも、江戸時代には中央銀行はありませんでした。このため、両替商たちはお互いに預金口座を持ち合って、自分たちの仲間うちで決済をしていました。両替商たちが預金を利用した決済システムを運営していたのです(コラム「決済の仕組み」参照)。

明治維新後、新政府は近代化政策の一環として、通貨制度に関するさまざまな改革を行いました。まず一八六八年(明治元年)に、自らお札(政府紙幣)を発行しました。これは江戸時代のお金の単位である「両」建てでした。一八七一年(明治四年)には新貨条例

という法律を作り、このとき初めて「円」というお札の単位を導入し、円建てのお金、銀貨、そしてお札(新紙幣)を発行しています。また、一八七二年(明治五年)には国立銀行という制度を作りました。国立銀行は民間の銀行ですが、国からお札を発行する権限を与えられ、それぞれの国立銀行がお札(国立銀行券)を発行することになりました。アメリカのナショナル・バンク制度に倣ったと言われています。国立銀行は全部で一五三行設立されました。

一八七七年(明治十年)に西南戦争が起けると、政府は戦費調達のために自ら紙幣を増発したり、国立銀行から国立銀行券を借りて支払いに充てたりしたため、お札の信用が失われてしまい、金貨や銀貨の価格とお札の価格が乖離しました。一八八一年(明治十四年)には、銀貨の一円と交換するのに、お札が一円八〇銭必要でした。

日本銀行設立の前年、一八八一年(明治十四年)にどのような種類のお札が日本で流通していたかをみてみると(表1)金属のお札が四二〇〇万円、お札が

一億五三〇〇万円と、お札の流通量の方が多かったのです。また、金属のお札の中では金貨が一四〇〇万円、銀貨が一七〇〇万円、さらに、江戸時代から使われてきた銭貨も流通していました。

当時大蔵卿(現在の財務大臣)を務めていた松方正義は、日本銀行設立の趣旨について次のように説明しています。

中央銀行を創立する理由は金融の流れを円滑にすることである。一国の経済の中で金融が果たす役割は、あたかも人間の体の中を血液が循環して手足の動きを助けるようなものである。中央銀行は経済におかねという血液を送る心臓のような存在である。

## 設立直後の日本銀行

日本銀行は一八八二年(明治十五年)に設立されましたが、設立当初の日本銀行はお札を発行していませんでした。銀貨、金貨といった金属のおかねとお札の価値が乖離していて、そういうときに、お札を発行しても信用されないだろうと考えられたからです。この





写真4「日本銀行兌換銀券旧十円券（大黒札）」（日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵）



写真3「国立銀行紙幣消却ニ関スル命令書」（大蔵卿松方正義、日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）



写真5「九州支店設置ノ議」（1893<明治26>年、日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

ころの日本銀行が行った重要な仕事は、お札の価値が安定するまでの間、流通量が多すぎたお札を回収することでした（写真3）。開業三年後の一八八五年（明治十八年）、お札の価値が安定して、一円のお札が一円の銀貨と同じ価値で交換できる状況になったときに初めて銀行券を発行しました（写真4）。これは兌換銀券<sup>だかん</sup>といって、一定量の銀と交換することを約束したものです。こうした制度を銀本位制と言います。

銀行券の発行と並ぶ日本銀行の大事な仕事として、国内の決済シ

ステムの整備、拡充があります。設立当初の日本銀行には、本店と大阪支店の二つしか店舗がありませんでした。このため、民間銀行とコルレス契約という一種の預金取引をすることによって日本全国の金融を結び付けることにしました。一八九〇年ごろには、日本銀行は民間銀行との間で一五〇件程度のコルレス契約を結んでいました。さらに、一八九〇年代からは、地方の拠点を拡充し、一九〇〇年ごろまでに七道府県に一〇の拠点を設けます（写真5）。こうして日本銀行は、銀行の銀行として民間銀行から預金を預かり、また貸し出しを行いながら、全国の金融に關与する度合いを高め、日本経済におかねという血液を送り出す体制を整えていきました。

一八九六年（明治二十九年）には、日本橋本石町に本店の新築移転を行いました（写真6）。

その翌年、一八九七年に日本は銀本位制から金本位制に移行します。金本位制とは、国内のおかねの価値を一定量の金と結び付ける制度で、このときから日本銀行券は、一定量の金と交換できるよう

になりました。当時、イギリスやアメリカをはじめ世界の主な国々は金本位制を採用しており、日本が金本位制を採用したことによって日本経済と海外との結び付きはさらに深まりました。こうして一九世紀の末ごろまでに、日本における近代的な通貨制度がほぼ完成しました。（次号へ続く）

\*ここに示された意見は執筆者に属し、必ずしも日本銀行の見解を示すものではありません。



写真6「日本銀行落成之図」（篠原清興【画】、日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵）

## コラム 決済の仕組み

一口に「おかね」といってもいろいろな種類があります。すぐに思い浮かべるのは、目に見えるおかね、お札や硬貨という現金です。日本銀行はお札（日本銀行券）を発行し、お札や硬貨が全国どこにおいてもきちんと使えるようにしています。

ところで世の中では、目に見えるおかねばかりが使われているわけではありません。さまざまな場面で、現金をやりとりするのではなく、銀行預金を使った決済が行われています。例えば、会社同士で資金をやりとりするときや、個人でも家や車といった高額の商品を買うときには、いちいち現金を使って決済するのは手間もかかりますし、運搬している途中で事故に遭ったりすると大変ですので、おかねを支払う人の口座から受け取る人の口座に預金の残高を移すことによって取引が行われています。こうした決済の仕組み（決済システム）が効率的で安全なものであるようにするのも中央銀行の仕事です。

図1をご覧ください。AさんがBさんに物を売り、買い手であるBさんは、Aさんに現金で代金を支払います。もし手元に現金がなかったら、Bさんは自分が預金口座を持っている民間銀行へ行き、自分の口座から現金を引き出して、それでAさんに代金を支払います。

民間銀行は日本銀行に預金口座を持っていて、必要に応じて日本銀行から現金を引き出してきて、窓口での支払いに備えたり、ATMの機械に入れておきます。Bさんが支払った現金は、元をたどれば日本銀行の窓口から民間銀行を通じて世の中に出て行ったものということができます。

ところで、Bさんから現金を受け取ったAさんは、当分の現金を使う予定がないので、民間銀行に預金したとします。預金を受け入れた銀行では、自分の手元に置いておく分以外は自分が預金口座を持っている日本銀行に入金します。こうして、日本銀行の窓口を出た現金は、再び日本銀行の窓口に戻ってきます。

次に、預金口座を使った決済についてみてみましょう（図2）。例えばBさんがAさんから車を買ったとします。Bさんは、自分が預金口座を持っている銀行（取引先銀行）へ行っ、て、Aさんの取引先銀行の口座に代金を振り込むように依頼します。両方の銀行は日本銀行に預金口座を持っており、Bさんの取引先銀行は、自分が日本銀行に持っている預金口座から預金の残高を引き落として、その金額をAさんの取引先銀行が日本銀行に持っている預金口座に入金します。Aさんが取引先銀行に持っている預金口座にその金額が入金されて、Aさんのおかねになります。目に見えないのですが、預金というかたちのおかねが民間銀行、日本銀行の口座を通じて動いていることになります（注）。

みなさんがコンビニエンス・ストアに行って、缶コーヒーを買うとします。コンビニエンス・ストアの店長さんは、その缶コーヒーを卸売業者から仕入れ、卸売業者はその缶コーヒーをメーカーから買うとします。この場合、メーカー→卸売業者→コンビニエンス・ストア→消費者と、商品が作られてから消費者の手に入るまでの間に四者の間で売買が行われていることになります。

みなさんがコンビニエンス・ストアで缶コーヒーの代金として支払う100円玉は民間銀行にある預金から下ろしてきたおかねで、コンビニエンス・ストアの店長さんは一日の売り上げがたまると、それを民間銀行に持って行って自分の預金口座に入れるとします。ここでは現金が動いています。一方で、例えばコンビニエンス・ストアと卸売業者とか、卸売業者とメーカーとの間では、現金ではなくて預金口座で決済がされるのが普通です（図3）。

このように、商品が動く裏側で目に見えるおかね（現金）や目に見えないおかね（預金）が、世の中をぐるぐると回り、日々取引が行われて経済が成り立っているわけです。このとき中央銀行の姿は表には見えないのですが、世の中におかねがきちんと出回っていくように、さまざまな役割を果たしています。

（注）手形交換所や銀行間のシステム等を通じて民間銀行がお互いのおかねのやりとりを相殺する仕組みもありますが、その場合でも最終的な決済は日本銀行の預金を通じて行われています。

図1 現金の発行・流通

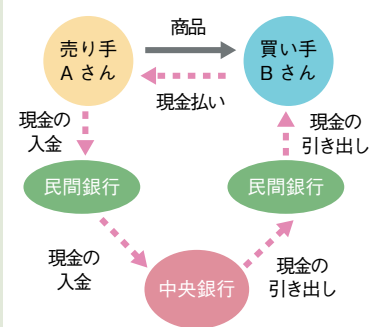


図2 決済(預金)システムの運営

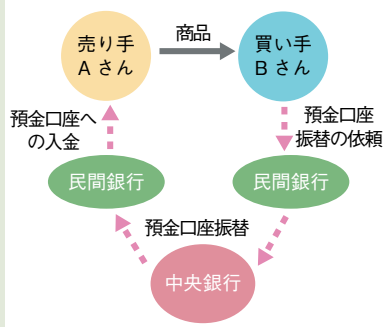


図3 商品とおかねの流れ(例)

